

復興支援フォーラムニュース No.12

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>)

<事務連絡先 今野順夫(tkonno67@gmail.com) 中井勝己(024-548-8313)>

原発事故による医療機関の被災と再生へむけてのとりくみ

生協いいの診療所 松本純

はじめに

東日本大震災に伴う原発事故から1年がたちました。

福島県はこの年度替わりを機会に「自主避難」による人口流出がさらにすすむのか、あるいは安心・安全な「帰還」は可能なのか、なお不安定なところにあります。この間「原発ゼロ」の日本をめざす運動は大きく広がりましたが、しかし一方では再稼働をめぐる動きとの間で、まさにせめぎ合いとなっています。

ここでは医療機関の被災を整理し、これからの復興・再生の課題を考えたいと思います。

1、地震・津波そして原発事故による医療機関の被災

① 原発近隣の施設・病院における「緊急避難」

福島第一原発事故による避難指示は3.11の22時54分には3^{km}圏内へ発せられ、翌3.12早朝5時44分には10^{km}へと拡大されました。2.5^{km}には特養ホーム、3.5^{km}に厚生病院と県立病院、さらにもう一つの民間病院と老健施設はいへんな避難行路となりました。福島県病院協会の調査によりますと、30^{km}圏内に大小14の病院があり合計1333名の入院患者の緊急避難となり、その過程で24人におよぶ犠牲者を出したとされています。

② 屋内退避指示が2週間におよんだ南相馬市といわき市一部

南相馬市は2週間におよぶ屋内退避の後「緊急時避難準備」とされ、各病院ともそれぞれに困難な非日常に至りました。いわき市の一部は屋内退避を指示されましたが、テレビのテロップにより全市が避難し始め一時的には医療崩壊の状況となりました。

③ 1ヶ月後に「計画的避難」を指示された飯館村、川俣町山木屋地区(以下山木屋)

浪江町津島の国保診療所や飯館村では当初は避難者受け入れに協力していましたが、実はその間に放射能汚染にみまわれていました。そして一カ月以上がたった4月22日、飯館村と山木屋は「計画的避難」を指示されることとなりました。

④ 低線量汚染＝自主避難地域の困難

東北新幹線・東北自動車道の走る中通り地方の伊達・福島・二本松・郡山各市は福島県の約半数の人口を占めます。県中・県南地方の各病院は地震による建物の被害を受けたものの津波はありません。しかし土壌汚染によってこれから長い年月にわたる放射能障害の不安に悩まされることとなりました。

2、地域の救急医療と介護の事業

① 浜通り地方の救急医療体制と地域医療・介護の事業の立て直し

浜通りの医療圏は相馬市・南相馬市といわき市とが分断され相双地方の三次救急は山越えの福島市か仙台市に頼らざるを得なくなりました。そして日常の慢性疾患管理や在宅療養生活がととのわず、いよいよ重症化して救急受診という悪循環におちいつています。

② スタッフ確保の問題

福島県は子育てに不安を持つ若い世代を中心に県外への避難によって住民の減少にみまわれています。それは医師・看護師をはじめとする医療従事者においても例外ではありません。医療機関や介護施設の人的体制を立てなおす上での努力が続いています。

③ 経営問題

現在の診療報酬制度のもとではスタッフ不足によって請求点数は下がり、稼働ベッドの減少はさらなる収入の減少となります。一時的な対策では済まない問題もあり中長期的な見通しをもてないなかで苦しい経営問題をかかえています。

3、再生へむけての取り組み

① 福島県の放射能汚染と健康問題

放射能汚染から県民の健康をいかに守るかの課題は復興・再生への条件として避けては通れない問題です。「3.11 当時の行動調査に基づくWBC」や「子供の甲状腺検査」の現状の課題について報告します。

② 福島県浜通り医療復興計画素案

福島県当局は特に浜通り地方の医療復興計画に取り組むとしています。住民が町に戻り始めるにあたって一次医療や第二次・三次医療が機能しているかどうかは重要な課題ではありますが、マンパワーを立て直す問題が立ちはだかっています。

③ 東北メディカル・メガバンク構想とその問題点

東日本大震災の被災地での医療を再構築するにあたって文部科学省は東北メディカル・メガバンク構想を推進しようとしています。これは近年注目の先端医療を被災地域の医療復興と連動して構築することにより雇用創出にも貢献しようとするものです。しかし「被災地住民」が研究対象としてふさわしいものかなど慎重に検討する必要があります。

おわりに

住民生活に重要な役割を担っている医療機関や介護の事業所の動向はいやがうえにも注目されるどころです。しかし今回の被災やそこからの復旧はたいへん重い課題でありました。そもそも原発と住民生活とは両立しうるのか、あらためて考える必要があります。

【第11回 ふくしま復興支援フォーラム】

日時 5月10日(木) 18時30分～20時30分(予定)
会場 福島市 市民活動サポートセンター・会議室
(チェンバおおまち 3F) (福島市大町4-15)
報告者 岩下 哲雄 氏 (福島県社会福祉協議会前副会長)
テーマ 「震災後の福祉・介護の現状と課題」

第9回ふくしま復興支援フォーラム（4月6日）のご意見等

★ 安全で安心できる学校で過ごす権利を、国は保障すべきです。例えば、学校給食だけでなく、保育所・幼稚園でも、セシウムを排出するのに有効な食材を使った給食が必要ではないでしょうか。そのくらいの事、文科省は行政の区分けにこだわらずに、被災した子どものためにやって欲しいと思います。本当に子供の生命を考えているのでしょうか。また、教育環境の除染も、地域住民の生活（収入）が成り立つように給与形式にしてはと思います。まだ、学童保育もほとんど室内です。異常な光景です。（郡山市立薫小学校の、もとPTAです。）私に何ができるのだろうと戸惑いながらも、希望を持って発信できたと思います。今日はありがとうございました。（S.K）

★ いい報告と意味深い討論であった。（S.I）

★ 原発の是非論の問題は、低線量被曝を克服するうえで、前提におかれるものです。（O.S）

★ 地域や親が子供のことを考えて不安に思っている一方で、子供たちは地元への愛着や地元で生きる希望を見出しているとの話は新鮮だった。放射線からの安全だけが人として生きる前提ではないということだろうか。子は宝というが、家族も地域も子供を中心に、動いていることも気付かされた。（K.W）

★ 親の放射線不安によって、子どもの健康も、コミュニティも、育つ場も弱まっています。確かに、親・子・全ての人々が、自治体が原発災害によって試練が与えられ、今までの生活・社会の中で生きることの大切なこと、必要なことなど体験しますが、失ったことの何%あるだろうかと考えさせられました。3.11以前の生活には戻れませんが、それ以上のものになるように前向きに自律・自立できる生き方が求められていますね（学ぶものがありました）。

マスメディアでは、原発収束へ除染が進んでる～帰村・町始まっている～原発始動と情報化されている。原発事故原因立証も、何が安全・安心かも確証ないのに、政府は4大臣密室協議……。国民・被害者を放射線物質、量、地域区分、損害賠償額、帰還条件などで分断が成り立っていることは「安く」「早く」「風化させる」側の社会情勢にありますね。素直になって現実、要因、未来をきちんと考え行動することが重要である。そのために生きてゆきます。（H.S）

★ 震災（被ばく）を期に、自分なりに考えるに至ったことを補強していただいたような気がいたしました。（T.I）

★ 子供への森林、自然環境教育や自然体験活動を、野外でどうやったら、又はどの線量なら実施できるのか、学校や保護者の方との共通認識を持てる環境を作らないと、子どもたちにとっては体力の低下、自然への理解力の低下、情操教育の欠如等、子供の放射線による直接の健康被害より深刻な影響がでてきてしまうと思います。（K.Y）

★ 飛散放射線物質による汚染状態にある福島県における子供を守る方策、教育のあり方について勉強させていただきました。（K.F）

★ 福島の復興には、子ども・若者の活躍にかかっていると思います。子ども・若者に見捨てられないようにするが、今回の話を聞いて、大人の役割を思いました。（Y.I）

★ 境野先生の視点、大切なところをきちんと述べていただき、ありがとうございました。（T.K）

★ いろいろな複雑な気持ちの中で生きている今の福島の人々、安全と安心を創っていく

ことが、今やるべきことなのだと思います。ゆるやかな関係を創りながら、身近な人たちと共に力を合わせて、子どもたち、若者たちを育てていきたいと思っています。ありがとうございました。(C.W)

★ 今までの出来事・流れをまとめる事は、とても意義のある事だと思います。大震災と子どもの貧困白書の中で、高校生が「何も知らないくせに、汚染された村として知られてしまった」と書いていましたが、それが現状の全てを表していると思います。東京などでは、メディアを通して得る、いわゆる“絵になる被災地”の情報ばかりで、何が失われ、何が得られたのか・ほとんど知られていません。安心して暮らしていくためにも、県内だけでなく、周囲が正しい理解をしていく必要があると思いますし、そうなって欲しいと願っています。(R.M)

★ 今も、支援になかなかつながらない子どもたちがいると思うと、胸が痛みます。『大震災と子ども貧困白書』に書かれた高校生たちのように、すべての子どもたちが前向きに考えられるわけではないと思います。地元に戻れずに苦しんでいる人、自身の将来像を絶たれた人。先が見えない不安が、様々な部分にゆがみを出してしまう。とてもデリケートな問題であるが故に、今後の教育や、子どもたちの「育ち」の難しさを改めて痛感した次第です。

その一方で、「子どもたちは、震災の影響で病んでいる」という、一方的な決めつけは、いかがなものかという、新しい視点を得ることができました。ありがとうございました。(M.A)

★ 子どもたちは、“誰が”で物事を見ているのではなく、“なぜ”という視点で物事を見て考えているように思います。子どもたちは、犯人探しではなく、きちんと原因を考えたかと思っっているように思います。そして解き明かしたいと考えています。(S.K)

(以上の会場で戴いた文書によるご意見等とともに、後日、メールでも次のご意見等が寄せられています。メールによるご意見等も大歓迎。)

★ 学校は地域にとっては不可欠。学校で学ぶ子供たちは地域の将来を担う。早急に放射線の不安が解消され、学校から子供たちの元気な声が聞こえるようにしたい。(R.N)

★ 6日のお話はとても勉強になりました。境野先生は、せっかく萱ぶきのステキなお家に移られ自然食にこだわって来られたのに、皮肉なことでお気の毒です。

9日10時～12時で郡山の平和委員会を行いました。

2万人が避難した福島の学校教育の現状、全体像が見えて良かったと思いましたので、講演の内容をざっと説明して資料もメンバー分コピーしました。

聞いたところでは小学校の給食でお弁当持参の子、牛乳を飲まない子、などで給食費の差し引き計算をするそうです。

日常の教科指導だけでも大変なのに、放射能のせいで親同士の反発もあり、不払いも発生しているとか。学童保育の先生をしている委員さんが、こどもや親からいろいろ聞いて、福島は最後は見捨てられると嘆いていました。

10日、理事協議会がいずみの生活文化の会議室で開催されます。

いただいた資料をもとに、これから食の分野や若い母親の交流など、生協ができそうな子どもの支援を話してみます。(S.K)